

かね

暁鐘の音

53

寸陰



ここにきて政府もやっと「緩やかな回復基調」という文句を外した。言い換えれば景気の状態を認めたということである。ただし、それ以上のものではない。

いまや政府がやれることは殆どない。これまでのような公共投資はやればやるほど企業の体力を弱めてしまっただけだ。そんな金があれば減税に回すほうがよっぽど効果がある。病人に点滴を打つても命を長引かせるだけであって病気の原因を取り除かれるわけではない。それどころか二度と点滴のチープを外せないようになつてしまふ。それよりも同じ資金を消費者に回すことで、正常な競争が促進される。病人の格好をして消費者に救済を求めても何の効果もない。本来の経済活動によって、消費者や顧客に受け入れられた企業だけが立ち直ることになる。だが、残念ながら今のところそのような政策が為される兆しは見えない。

このような状況では、企業は自分の力で切り抜けていかなければならない。企業が生産性の改善に取り組むことで問題になつてくることとして、忙しい人とそう



でない人の格差が広がっていくことが挙げられる。仕事は均等に分けられることはなく、出来る人に集中する。残念ながらこの原則は社会主義の国でないかぎり変えることは出来ない。仕事が出来ないようにすれば磁石のように新しい仕事を吸い寄せ

て、どんどん膨らんでいく。もちろん見た目に暇な人はいないだろう。だが、仕事をどんどんこなして忙しい人と、旨くこなせなくて忙しい人とは、時にはその生産性は一。倍も開いてしまふことがある。もちろん全員が一。倍選手になれるわけではないし、そのような人ばかりを集めたとしても、生物界の二。%の法則から逃れられないだろう。やはりチームとして、あるいは組織として、いくつかのパターンの人を混ぜながら生産性を上げなければならぬ。

ところで「忙中有閑（忙中閑有り）」という言葉がある。この「閑」は、単に「ひま」と読まれては困る。時間が一杯ある人の「ひま」ではない。そのような「ひま」は「暇」と書く。「閑」には「静か」とか「のどか」とか「みやびやか」という意味もある。とても忙しい中に珠玉のような



「閑」をつくる。もっとも「小人閑居して不善をなす」という諺もある。こつちの「閑居」は何にもすることがない「暇」である。

江戸時代の佐藤一斎の記した重職心得箇条にも「重職たるもの、勤向（たうきむき）多と云う口上は恥べき事なり。仮令（たとえ）世話敷とも世話敷と云わぬが能きなり、随分手のすぎ、心に有余あるに非れば、大事に心付かぬもの也。」とある。

重職たる者忙しいのは当たり前。その中でも忙しさに埋もれない工夫が必要になる。上に立つものが一緒になつて忙しく走り回つていては、誰も大事に気付かず、気付いた時には手遅れという事態を招く。もちろん重職たる者も暇でいたわけではない。それどころか陣頭指揮で走り回つていたと言つたろう。だが重職たる者

それで許されるわけではない。いくら忙しく走り回つても、大事に気付かなければ役目を果たしたことになる。そのためには、普段から「閑」、すなわち心の余裕をつくる工夫が必要になる。忙しい中にせめて一時間でも自分の時間を持つことが必要になる。



忙しい人にまとまつた時間は存在しない。だからわずかな時間、すなわち「寸陰」を惜しまなければならぬ。自分の心を豊かにし、「静」なる「寸陰」を作つて、「人間」を見つめ直す機会をつくらなければならぬ。一回わずか一分でも、集中すれば結構ものを考えられる。人は忙しくなればなるほど「閑」が必要になる。これがなければ、忙しい

さの中に自ら埋没してしまい、早晩行き詰まる。そして不本意にも有り余る「暇」を手にするようになる。企業という中では、その時点で求められる役割を果たせなければ、居続けることは出来ない。もちろん立ち場によって自分の役割をうまく調整しながら居続けることは出来る。ただしそれでも、その役割が必要である場合に限られる。厳しいものだが、「生産性の高い企業、組織だけが、市民権を得られる」（ジャック・ウェルチ「GE会長」）というのは、競争を原則とする社会においては避けることは出来ない。そしてその進路を分けるものは「寸陰」を惜しむかどうかである。



今月の一言

「パフォーマンスが悪いののはソフトの問題だ」「このハードでは他にやりようがないではないか」

新しい製品の開発の度に、ソフト部門とハード部門がお互いを主張して譲らない光景をみる。

営業部門と開発部門との間でも同じ様な対立が起きることがある。双方がそれぞれの立ち場から一歩も出ることなく主張しているのは、なにも解決しないことになる。

「党派根性は最も勝れた人間をも集団の中の小人にする」

（ラ・ブリュイエル フランスのモラリスト）

範囲が狭かったり、自分の守備範囲から一歩も外に踏み出さなければ、そのうちに自分の担当範囲以外のことは考えなくなる。限定される方が楽だから、放っておけば自然とそう

なる。しかしながらその結果として、自分の守備範囲すら「判断」できなくなる。自分の立場より一つも二つも上げたり下げたりしてもを考えるようにしなければ、必ず党派根性が身に付いてしまふ。そして一旦党派根性が身に

ついてしまえば、折角の「材」も「杭」にしかならない。人材はそれを見い出すのも難しいが、それを配置し、伸ばすのはもっと難しい。

根性が身に